

唐汝詢『唐詩解』に関する研究

陳，禕璇

<https://hdl.handle.net/2324/7363549>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名 : 陳 禕璇

論 文 名 : 唐汝詢『唐詩解』に関する研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は中国明時代に出版された、ある唐詩選集と、その著者に関する研究である。その名は唐汝詢（1566～1659）、明代末期の上海松江府に生まれ育った。実家はその地で代々家塾を営み、地域の若者たちに読み書きを教える中流の読書人家庭であった。彼は幼少5歳の時に両眼を失明した。しかし家族の懸命の支えによってその絶望から立ち上がる。書物を音読によって聞き覚えたのである。当時の上海には楚漢の戦闘や三国志、また西遊記や水滸伝のような小説を読み聴かせたり、またそれらの一節に音曲を付けて歌語りをしたりするさまざまな芸能があり、その台本を街角で販売することもあったようである。また家塾という家庭環境がさいわいして、彼は四書五経はもちろん、当時の經史子集の基本的な書籍をすべて音読で暗記することもできた。彼は同時代の人々から「異人」として高い評価を受けるのだが、その畢生の著作が唐代の詩歌約1500首を選び、その語彙の出典や、詩の内容をわかりやすく講義した『唐詩解』50巻である。

本論文の序論と第一章「唐汝詢について」は、これまでの日本と中国における先行研究を紹介し、唐汝詢に関する伝記資料の整理とその生卒年などについて考証を行っている。また本論文の末尾には、早稲田大学図書館所蔵（澤田瑞穂旧蔵）の『西陽舌瑣』全編と、日本の国立公文書館内閣文庫に所蔵される唐汝詢の詩文集『西陽山人編蓬集』と同『編蓬後集』の序文の原文とその書き下し、現代日本語訳とを付している。前者は晩年の唐汝詢が自らの生い立ちを語った回想録であり、後者の序文にも彼の詩文創作のようすやその交友関係が述べられている。

第二章『唐詩解』の成書過程」と第三章『唐詩解』が参照した底本」は、いよいよその『唐詩解』著述に関しての考察である。唐汝詢の周囲には彼を中心とする文学結社「雅社」というグループが存在した。また、『唐詩解』初版完成の直後、松江府に大火災があり、焼け出された唐汝詢一家は一時南京へ避難するのだが、そこでの新たな交友関係から、『唐詩解』は南京で再び第二版が出版され、世間にも大きく知れ渡るようになった。また、現在もなお約5万首が伝存している唐代の詩歌であるが、盲目の唐汝詢は当然ながらその各種の版本を自由に読むことができない、彼が読み聞かせによって知り得た唐詩の底本は何であったのかというと、明代初

期に編まれた高棟の『唐詩品彙』と同『唐詩正声』、そして中期の李攀龍『唐詩選』を主とするものであった。これら明代の先行する唐詩選集があったからこそ、彼はこの偉業を達成することができたのである。

しかし、唐汝詢が独自に入手した作品や、また新たな評価を与えた作品も少なくない。第四章『『唐詩解』の選詩姿勢』では、杜甫と白居易の採録作品に対象を絞って、その独自の文学観を考察したものである。明代の特に王世貞や李攀龍たちの言説によれば、唐詩は盛唐を最高のものと捉え、それ以後の中唐・晩唐期の作品は、もはや末世の卑小なものとして取り上げないのが一般的であった。いわゆる「文は秦漢、詩は盛唐」と称された文学活動である。特に中唐の白居易の詩歌は、高棟『唐詩正声』や臧懋循『唐詩所』、そして李攀龍『唐詩選』においてはたった一首でさえ採録されず、厳しい評価が続いた。だが、唐汝詢『唐詩解』は、白居易の作品を一挙に八首も収録し、しかもその中には長編の「長恨歌」「琵琶行」を含んでいる。この唐汝詢独自の見解は、その後、清代以降の唐詩選集に大きな影響を与えることになる。また、杜甫についても、かつてはその青壮年時代の長安での詩歌に評価が集中する傾向にあったが、晩年の中国南方を漂泊した時期の作品、例えば「遣興五首」すべてを収録するなど、これも後世に受け継がれてゆく新しい見方を示した。

第五章『『唐詩解』の注釈と評釈』は、唐汝詢が独自に切り開いた唐詩注釈の方法と、そこから導き出された数々の新しい解釈についての考察を行った。目の見えない唐汝詢は、自分が理解し得た唐詩の解釈を、全て言語化して周囲の門人や家族に伝える必要があった。だが、この障害があったが故に、それまでは読者の胸の内にずっと秘められたままであった「古典詩の解釈」というものが、はじめて一般の民間人にも伝えられることとなり、やがて次の清代の新たな唐詩選集の潮流を生み出す結果となったと考えられる。

以上の考察を通じて、これまでは明代の唐詩選集の単なる「亜流」として、ほとんど文学史の考察に取り上げられることのなかった唐汝詢『唐詩解』について、その成立の過程での苦労や、文学史上の画期性などについて、新たな探究を行った。